日本語版 公判前陪審員態度質問紙 (PJAQ) の作成の試み

～内部構造と妥当性の検討～

○藤田政博¹

(¹関西大学社会学部)

キーワード：陪審員偏見尺度, 社会的態度, 裁判員

Making Japanese version of Pretrial Juror Attitudes Questionnaire: Investigating its internal structure and validity

Masahiro FUJITA¹

(¹Faculty of Sociology, Kansai University)

Key words: Juror Bias Scale, social attitudes, lay participants of justice system

目 的

司法における市民参加は、裁判員制度導入以降特に重要なものとして意識されるようになってきた。そして、この制度が浸透するに伴い、裁判における判断者の特性が判断に及ぼす影響についての関心も高まっている。日本国憲法は公平な裁判所の裁判を受ける権利を保障しているからである。もし判断者の特性によって公平でなくなることがあるとすれば実際上大きな問題となる。

本研究では、今後裁判における判断への影響を探ることを念頭に、判断者の特性を測定することとした。具体的には、偏見や司法制度に対する態度などである。

米国の陪審研究では、陪審員偏見尺度 (Juror Bias Scale: Kassin & Wrightsman, 1983) やその改良版である公判前陪審員態度質問紙 (Pretrial Juror Attitudes Questionnaire: Lecci, & Myers, 2008)、改訂版法的態度尺度 (Revised Legal Attitudes Scale: Karvitz, Cutler, & Brock, 1993) 等が開発されている。

そこで、本研究ではこれらの質問紙を日本語訳した上で内的構造や妥当性について検討することとした。妥当性の検証のために同時に尋ねることとしたのは、社会的望ましき尺度、内的-外的統制志向尺度、正当世界尺度、Thurston の死刑態度尺度、権威主義尺度 (与那嶺・東江, 1965) である。

方 法

調査は株式会社日経リサーチに依頼し、インターネット上に回答用ウェブサイトを構築して行われた。調査開始は2012年2月24日、終了は2月28日であった。日経リサーチがもっている登録モニタープールからランダムにサンプルされたモニターに回答依頼が電子メールで送信され、それに任意に応じた回答者がオンラインで回答を入力した。登録モニターの住所は日本全国に分布し、年齢は20～69歳で平均46.38歳 (SD14.07)、男性893名 (51.4%)、女性845名 (48.6%) であった。調査依頼の送信数は9822、それに対して有効回答数1783であり、回収率は18.2%であった。

質問項目の内容は、目的で触れた各尺度および人口統計学的属性に関する質問群であった。

結 果

得られた各尺度のまとまりを見るために因子分析を行った。主因子法とプロマックス回転を用いた。因子数はスクリープロットを見て決定し、すべての因子負荷量の絶対値が0.4以上になるまで項目を削除し因子分析を繰り返した。

JBS では3因子が抽出された。各因子は、厳罰傾向 (.62)、無罪傾向 (.50)、被告人への同情と名付けられた。PJAQ では2因子が抽出された。各因子は、厳罰傾向 (.75)、司法への不信 (.74) と名付けられた。RLAS については3因子が抽出され、司法の廉潔性 (.74)、強力な法執行の期待 (.62)、疑わしきは被告人の利益に (.56) と名付けられた (括弧内は α)。

人口統計学的変数を統制し、各変数と司法参加への態度との偏相関を見たところ、おもな結果は次のとおりであっ

た。JBS と PJAQ の厳罰傾向が0.67、権威主義得点とは.40の相関があった。JBS の無罪傾向得点は、RLAS の司法の廉潔性と.31、疑わしきは被告人の利益にとは.38の相関があった。PJAQ の厳罰傾向得点は死刑態度とは.26、権威主義得点と.46の相関があった。PJAQ の司法への不信は司法の廉潔性と-.51、外的統制志向と.31、死刑態度得点と.22、権威主義得点とは.30の相関があった。RLAS の司法の廉潔性は上記の他、外的統制志向と-.24、死刑態度とは-.20、権威主義得点とは-.27の相関が見られた。RLAS の強力な法執行への期待は、JBS の被告人への同情とは-.38、権威主義得点とは-.1の相関が見られた。RLAS の疑わしきは被告人の利益に得点は、JBS の無罪傾向と.38の相関が見られた。

考 察

PJAQ は JBS の改良版として開発されたこともあってか、2因子がはっきりと抽出され、抽出されたあとでの下位尺度の信頼性係数の推定値が他に比較すると高かった。それに対し、JBS は因子構造がそれほど安定せず、また得られた下位尺度の信頼性係数の推定値が低かった。

因子としてのはっきりとしたまとまりを見せたのは PJAQ の厳罰傾向、司法への不信、RLAS の司法の廉潔性であった。まとまりが弱いが無罪傾向や疑わしきは被告人の利益というものもあり、司法に関する態度、あるいは陪審員に尋ねる尺度として意味がある因子として、こういったものがあることは今後の裁判員研究を行う際に念頭に置く意義があるだろう。

得られた下位尺度と外的統制志向、死刑態度、権威主義との関係を見ると、厳罰傾向が死刑態度や権威主義と正の相関を持ち、あるいは司法への不信が死刑態度との正の相関を持つなど、それぞれ合理的な推論が可能な相関係数が検出された。このことから、今回得られた各下位尺度は、他の尺度との関係において妥当なものであると考えられる。

今後は、今回得られた尺度をもとに、裁判員としての意思決定行動との関係を調べ、具体的行動との関係で妥当性を検証する必要があるだろう。

引用文献

- Kassin, S. M., & Wrightsman, L. S. (1983). The construction and validation of a juror bias scale. *Journal of Research in Personality*, **17**, 423–442.
- Kravitz, D. A., Cutler, B. L., & Brock, P. (1993). Reliability and validity of the original and revised Legal Attitudes Questionnaire. *Law and Human Behavior*, **17**, 661–667.
- Lecci, L. & Myers, B. (2008). Individual differences in attitudes relevant to juror decision making: Development and validation of the Pretrial Juror Attitude Questionnaire (PJAQ). *Journal of Applied Social Psychology*, **38**, 2010–2038.
- 与那嶺松助・東江康治 (1965). 権威主義尺度の構成について 琉球大学教育学部紀要, **8**, 197–203.